

連載シリーズ

英文法沼への招待

Vol. 1

ーYES/NO疑問文のルールー

英語の教科書や英文法参考書の解説を読んで、英語の規則を学習してきた方は多いだろう。かくいう筆者も、教科書や参考書の記載をもとに英語を学習してきた者の1人である。さまざまな表現に出会わずとも、文法規則を1つ学ぶことで、さまざまな文を理解したり、作ったりすることができる。文法規則を覚えているということは、何十、何百もの表現を記憶しているに等しいといえる。

そんな有益な文法規則であるが、教科書や参考書に載っている文法規則には、やや物足りなさを感じることがある。本連載は、誰もが知っている文法知識に関する疑問点に対して、英語学の知見から説明することで、その不足する部分を補っていくことを目的とする。

連載第1回目のトピックとして、Yes/No疑問文の作り方に関する疑問を取り上げる。英語のYes/No疑問文を作る場合、元の平叙文の語順に変化が起きる。例えば、(1a)のbe動詞が用いられる文をYes/No疑問文にすると、(1b)に示すように、主語Johnと動詞isの倒置が起こる。つまり、主語の名詞句と述語動詞のisが逆転しているのである。

- (1) a. John is a student.
b. Is John a student?

ある英文法参考書の記述を確認すると、

- (2) YesかNoで答えることのできる疑問文を一般疑問文（Yes/No疑問文）という。be動詞、Do/Does/Did、助動詞を文頭に出して作る（野村 2017: 21）

とある。確かにこの記述に従えば、(1a)の文から(1b)の疑問文を正しく導くことができる。では、次の例ではどうだろうか。

- (3) The boy who is angry is a student.

ご覧のとおり、(3)の文にはbe動詞isが2つ生起している。ここで(2)の規則を当てはめると、以下の3つの疑問文ができることになるが、両方のisを文頭に置いた(4a)や、左側のis（以下、is_L）を文頭に置いた(4b)は非文法的であるのに対し（[*]は「アスタリスク」と呼び、それが付随する文が非文法的であることを表す）、右側のis（以下、is_R）を文頭に置いた(4c)は文法的となる。

- (4) a. *Is is the boy who angry a student?
b. *Is the boy who angry is a student?
c. Is the boy who is angry a student?

このことから、(2)の記述では不十分であり、複数の動詞や助動詞が生起する文の場合、どの動詞、または助動詞を文頭に出すべきかを明確にする必要があることがわかる。

ここで問題となるのは、文頭に出すべき動詞、または助動詞がどのように決定されるかである。学校英文法的な記述であれば、「文全体の述語動詞、またはそれにつく助動詞」とすれば良いかもしれない。では、英語の知識を持つ話者は、この「文全体の述語動詞、またはそれにつく助動詞」とやらをどのように識別しているのだろうか。直観的に述べたならば、

- (5) 文頭から最も近い動詞、または助動詞を文頭に移動せよ

とするのが、最も経済的な操作であるように思われる。なぜならば、疑問文を作るのに語順を入れ替える際に、より近い候補があるにもかかわらず、わざわざ遠くのを文頭に持ってくる必要はないからだ。

しかし、(4)では、線的な順番でいうと遠い方の動詞であるbe_Rが文頭に出されるのが正しい解となっている。すると、(4)の規則が誤りであるか、もしくは、(4)は正しいが、線の順序とは異なる基準で近接性を測定している可能性のどちらかということになる。しかし、(4)に反して、遠くの要素を文頭に出すことを求める規則など存在するだろうか。

この問題を解き明かすのに必要となるのが、人間言語に固有の「構成性(compositionality)」という特性である。構成性とは、我々人間の言語が階層的な構造を持っており、言語表現を生み出す際に行われる脳内の操作が、この階層構造に依存するという特性のことである。以下で、これらの特性をより詳細に述べ、上記の疑問を解決していく。

そもそも、「言語が階層的な構造を持つ」とはどういうことだろうか。これを以下の例をもとに考えてみよう。

- (6) The boy ate this apple.

(6)の文は、the、boy、ate、this、appleという5つの語が、この順番で並んでできている。しかし、これらの語は隣同士が数珠繋ぎのように線的な順序で並んでいるわけではない。なぜならば、1つ目の語theと2つ目の語boyの間には、何か強い結びつきが（母語話者でなくとも）感じ

られるが、2つ目の語boyと3つ目の語ateにはそのような結びつきは感じられない。これは、3つ目の語ateと4つ目の語thisでも同様である。そして、4つ目の語thisと5つ目の語appleの間には、the とboyのような強い結びつきが感じられる。このことから、(2)の文は5つの語が一行にただ並んでいるのではなく、隣接関係を持つものと、そうでないものにわけられることがわかる。すると、この文は、少なくとも(7)のように、3つの要素から構成されることになる。

- (7) [the boy]-ate-[this apple]

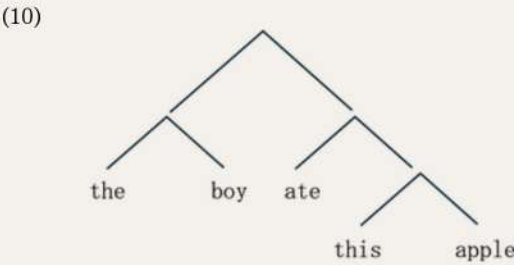
さらに、この3つの要素の間にも隣接関係の有無が存在する。1つ目の語句[the boy]と真ん中のateは、あくまで文中の主語と動詞という関係しかないが、真ん中のateと3つ目の語句[this apple]の間には、両者が合わることで述語という文法のかたまりを構成する隣接関係が存在する。すると、(7)の3つの要素はさらに、(8)のように[the boy]と[ate [this apple]]という2つの要素にまとめることができる。

- (8) [the boy]-[ate [this apple]]

さらに、(8)の前半部の[the boy]と後半部の[ate [this apple]]の間には、主語と述語という隣接関係が存在する。このことから、(6)の文は

- (9) [[the boy] [ate [this apple]]]

という構造を持っていることがわかる。これをより視覚的にわかりやすくすると、(10)の図になる。(10)の図は「樹形図」と呼ばれるもので、(7)-(9)にある[]間の2項関係を二又の枝わかれ線で繋ぐことで、両者の隣接関係を示したものである。



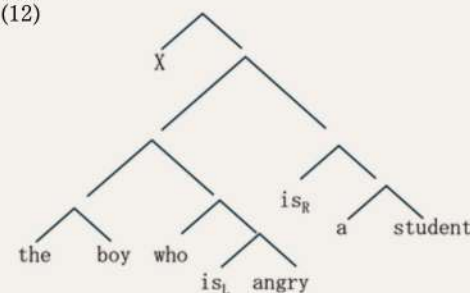
(10)に示すように、(2)の文は5つの語が数珠繋ぎのようにただ線的に並んでいるのではなく、隣同士の要素がかたまりをなしたものがつながりあった階層的な構造をしていることがわかる。この隣接関係により結びついたかたまりを「構成素(constituent)」と呼ぶ。また、(10のように、)文の構造を構成素ごとにまとめ、その階層性を示す分析方法を「直接構成素分析(immediate constituent analysis)」という。

人間言語で作り出される言語表現はすべて、直接構成素分析で示される階層的な構造を持つ。そして、さらに面白いことに、人間言語の文法操作は、この階層的な構造に基づいて適用される。その例が(5)である。(5)の記述には「文頭から最も近い動詞、または助動詞」という表現が含まれるが、これにはどの基準で最も近いのかの指定がない。もしすべての文法規則が階層構造に基づいて適用されるのだとすると、(5)の規則は

- (11) 文頭から構造的に最も近い動詞、または助動詞を文頭に移動せよ

のように修正することになる。

では、(11)の規則で(4)のYes/No疑問文を正しく派生できるかを確認してみよう。まず、(3)の文を直接構成素分析すると、(12)のように示すことができる。



(12)の構造は、is_Lとangryからなる構成素がwhoと結びつくことで、より大きな構成素（関係節に相当）を形成し、さらにこれがtheとboyからなる構成素と結びつくことで、より大きな構成素（主語名詞句に相当）を形成することを示している。そして、aとstudentからなる構成素がis_Rと結びつくことで、より大きな構成素（述語に相当）を形成し、さらにこれらの2つの大きな構成素が結びつくことで、(3)の文が形成されることが示されている。

次に、この構造をもとに、(11)の規則を適用してみよう。(11)にある「文頭」とは、Xの位置になる。つまり、Xから遡って最も近いisを探せば良いのである。では、まずXからis_Lの距離を計測してみよう。Xからis_Lに辿り着くには、枝分かれ線を5つ通らなければならない。次に、Xからis_Rの距離を計測してみよう。Xからis_Rに辿り着くには、枝分かれ線を3つ通る必要がある。このように、is_Rは、線の順序の基準ではis_Lよりも文頭から遠くなるが、階層構造に基づく基準ではis_Lよりも文頭に近くなるのである。すると、(11)の規則に従って構造的に最も近いis_Lを文頭に移動することで、(4)の分布を適切に説明することができる。

冒頭で指摘したように、英語の教科書や英文法参考書の記述は、時に不十分なものである場合がある。今回はその欠陥を、言語の構成性という特性から補うことを試みた。言語表現が構成素ごとにまとまった階層的な構造を持ち、その階層構造をもとに文法操作が適用されると仮定することで、不十分な(2)の記述を(11)の規則へと捉え直すことができることを示した。英語学習者が皆、英語学を学ばなければいけないというわけでは当然ないが、英語学の知見が教科書的な記述の持つ欠陥を補完し、より正確な規則に昇華してくれることは間違いない。

引用文献
野村恵造（監修）(2017)『Vision Quest総合英語Ultimate』啓林館、東京。
(平子快季)

ヨコのカギ

- Ⅰ：「法令・命令」を英語で

- Ⅱ：歴史や芸術、科学や自然に関する資料を収集・保管し、研究・展示する施設

CROSS WORD PUZZLE

タテのカギとヨコのカギから連想される英単語を以下のマスに当てはめて、太枠の中の単語を見つけ出そう。

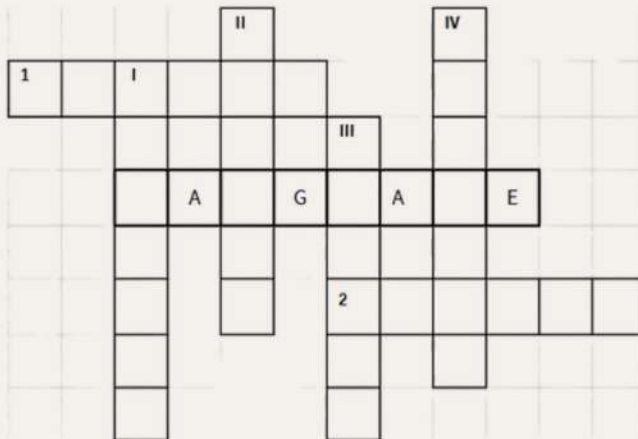
タテのカギ

- Ⅰ：私たちが常日頃通っている場所

- Ⅱ：長方形のコートの中央にネットを張り、ボールをラケットで打ち合って得点を競う球技

- Ⅲ：4季節の一つ。この期間の休みが一番長い

- Ⅳ：「提案する」を英語で



笑いの言語学 #1

―「帰れ」「入れ」はなぜ聞き間違えるのか？―

2024年の人気お笑い番組「ENGEIグランドスラム」で、お笑いトリオ―「えびしゃ」が披露した「かえれ？はいれ？」というネタが話題を集めた。このネタは、ある人物が発した一言をめぐる、周囲の人物が「帰れ」と聞こえたのか「入れ」と聞こえたのかで大混乱に陥るという、聞き間違いを軸にしたコントである。舞台では、ことばの受け取り方の違いから次々と誤解が生まれ、登場人物たちがあわてて訂正したり、ますます誤解を深めたりする様子がコミカルに描かれていた。たった一言の聞き間違いが、ここまでの展開と笑いを生むことに驚いた視聴者も多かったはずだ。このネタの面白さは、単なるドタバタ劇ではなく、ことばの音がいかに曖昧で聞き間違いやすいかという事実を巧みに利用している点にある。そもそも、「帰れ」と「入れ」は、語の意味としては真逆である。「帰れ」は命令のように聞こえる拒絶の言葉である一方、「入れ」は受け入れのサインである。そうであるにもかかわらず、音だけを聞いた時、なぜこんなにも聞き間違えてしまうのか。この疑問を解き明かす鍵は、音声学という言語学の一分野にある。

言語における発話音声のほとんどは、母音、または母音と子音の組み合わせによって成り立っている。母音とは、声の基本となる音で、舌や唇などによって空気を妨げず、口の中を開いたまま声帯を震わせ、空気を通すことで作られる音である。日本語では、「あ」/a/、「い」/i/、「う」/u/、「え」/e/、「お」/o/が基本の母音にあたる。また、二重母音というものも存在する。これは、1つの音節の中で2つの母音が滑らかに連続して発音されるもので、日本語で代表的なものは「はい」の/ai/などが挙げられる。これらの母音は、子音の助けを借りずに単独で音を出すことが出来る。一方、子音とは口の中のどこかで空気の流れを妨げたり、こすったりすることで生まれる音である。日本語では、「か」、「た」、「ば」の元となる。/k/、/t/、/b/などが挙げられる。これらは通常母音と組み合わせて発音する。例えば、「か」の音は/k/という子音と/a/という母音が組み合わさってできている。母音と子音の発音のされ方や音声的な特徴に注目すると、一見全く異なる意味を持つ「帰れ」と「入れ」が似た音として聞こえる理由が浮かび上がってくる。

CAN you distinguish between “MAY” and “CAN”？

助動詞mayとcanは、どちらも「～してもいい」という「許可」の意味がある。以下に例をあげて、両者の意味・機能の違いをみてみよう。

- (1) a. May I have your name？
あなたの名前はなんですか？
b. Can I have a cup of coffee？
コーヒーを一杯もらってもいい？

(1a)の文は、一般的に初対面の人に名前を尋ねる表現として用いられる。この文で用いられている助動詞mayには「許可」の意味があり、(1a)の文で名前を聞く許可を相手に求めていることになる。また、助動詞canにもmayと同様に「許可」の意味があり、(1b)のように、助動詞に続く動詞句が表す行為の許可を相手に求めるのに使われる。これらの例文からわかるように、mayとcanはどちらも「許可」の意味を持つ。

しかし、同じ「許可」の意味を持つとはいっても、mayとcanの両者にはいくつかの細かな違いがある。それゆえ、「許可」を表す文でも、mayとcanのどちらかしかが用いることのできない文が存在する。それらの例を見ていこう。例えば、(1a)と(2)の文を比較してみよう。

- (2) Can I have your name？

(1a)と(2)はどちらも「許可」を表す文であり、mayとcanのどちらも使えるように思える。しかし、canの持つ細かな意味とその文が使われる場面を考えてみると、後者は不適切である。まず、(2a)の文が使われる場面について考えてみよう。これは、人に名前を聞く時に使われる表現である。人に名前を聞く際、自分と相手は初対面である、またはお互いについてよく知らない場合がほとんどである。相手が自分より相当年下である、または自分と同じくらいの年齢である等の例外を除き、初対面の相手、またはよく知らない相手に名前を聞くのに、くだけた表現は使わないだろう。よって、敬意表現を用いて名前を聞くことが多い。そのように、改まった表現をする時に使われるのがmayである。一方、(2)の文だとかやくくだけた表現になり、mayを使うと「お名前を伺ってもよろしいですか」とcanよりも畏まった表現になるのである。中野(2014)によると、ビジネス等のフォーマルな場面で用いられるのがmayであり、家族や友人等身近な人に対してカジュアルな意味を持って用いられるのがcanである。よって、初対面でよく知らない人に名前を尋ねる時にはmayを用いる。
mayとcanの違いについて、もう一1つ例を挙げる。

- (3) May I have a cup of coffee？
コーヒーを一杯頂いてもいいですか？

(1b)と(3)の文は、どちらもよく使われる自然な表現である。また、前者は丁寧、後者はくだけた表現である。高級レストランのようなフォー

まず注目したいのは、両者に含まれる母音の類似性である。「かえれ」の「え」に含まれる母音/e/(エ)と、「はいれ」の「はい」の部分に含まれる二重母音/ai/(アイ)は、一見すると全く異なる音のように思える。しかし、実はこの2つの音は、聞こえ方や発音の仕方によっては非常に似通って聞こえることがある。こうした音の混同は、決して日本語に限ったことではない。

歴史的に見ても、さまざまな言語において母音が変化している例は多く存在する。例えば、江戸時代に日本で話されていた江戸言葉では、「帰れ」が「けーれ」、「おまえ」が「おめー」、「知らない」が「知らねー」など、/a/や/ai/の音が/e/に変化している。他にもギリシャ語では、大地の女神を意味する「ガイア(Gaia)」は別形として「ゲー(Gee)」と表現されることがある。英語では、日を意味する「Day」はイギリス英語では「デイ」や「デー」に近い音で発音される。一方、オーストラリア英語では「ダイ」に近い音で発音される。また、フランス語でも、「ai」という綴りがあっても/e/に近い音で発音されることがある。

このように、表記と実際の音が一致しない現象は珍しくない。つまり、/ai/と/e/という音の曖昧さは、世界の多くの言語において共通して見られる現象なのである。

では次に、子音について注目してみよう。「かえれ」の「か」に含まれる/k/の音と、「はいれ」の「は」に含まれる/h/の音は、どちらも無声音であるという共通点がある。無声音とは、声帯を使わずに空気の流れだけで出される音である。無声音には何種類かあって、「か」の子音/k/は無声軟口蓋閉鎖音と呼ばれる無声音だ。この音は、舌の奥を喉の奥の軟口蓋と呼ばれる部分にぴったりとつけて一度空気を溜め、閉じていた部分を一気に開くことで破裂音を生じさせる。一方、「は」の子音/h/は無声声門摩擦音と呼ばれる無声音である。この音は、口の中を閉じずに喉の奥の声門と呼ばれる場所あたりで空気を摩擦させて出す。どちらも息の流れによって生じる音であり、声の強弱やスピード、話者の発音の癖などによって聞き間違えやすいのである。

さらに、人間の脳には、補完という働きがあるということも聞き間違いの一因と考えられる。この補完とは、実際に聞こえてない音を、文脈や経験に基づいて無意識のうちに補ってしまう現象のことである。

例えば、「こんばんは」の「ば」の音を完全に消し去ると「こん□んは」と聞こえるが、空領部分に雑音を挿入すると雑音の陰で「ば」という音のはっきり鳴っているように聞こえる。「かえれ」と「はいれ」のように、似た語の場合も同様である。「□えれ」と聞こえたとき、話者が怒っていると聞き手が感じたならば「帰れ」と捉えるだろうし、優しくそうならば「入れ」と捉えるだろう。つまり、完全に聞こえていないわけではなくても、聞き手の“きっとこう言ったはずだ”と言う予想と実

マルな店で注文する際は前者を、カジュアルなカフェのような店で注文する際は後者を用いる。このように、mayとcanはどちらも「許可」の意味を持つが、mayはフォーマルな場面、canはカジュアルな場面で用いられるといった違いがある。

しかし、mayとcanの違いはフォーマリティの違いだけなのだろうか。もしそうだとすると、フォーマルな場面では(1a)の表現が用いられ、カジュアルな場面では(2)の表現が用いられるという分布がみられるはずであるが、そういうわけでもない。このことから、mayとcanの間には単なるフォーマリティの違いだけではなく、意味的・機能的な違いがあると考えられる。

では、mayとcanをわけける意味的・機能的な違いとはどのようなものだろうか。ここで、「許可」の意味を表す助動詞が使われる場面で、mayとcanのどちらかを用いるかについて他にも例をみてみよう。canは、誰かによって既に許可が与えられていることがらに用いられる。

- (4) It’s not fair. My sister can stay up late, and my mom tells me to go to bed early.
不公平だよ。姉は遅くまで起きていていいのに、お母さんは私には早く寝ろと言うなんて。

という文では、話者の姉は遅くまで起きていても母に何も言わない（＝夜更かしすることの許可を母から得ている）ことが推測される。しかし、話者は母から早く寝ろと言われる（＝夜更かしすることに関して母から許可を得ることができていない）ことがわかる。話者の姉は、母親から夜更かしする許可を前々から与えられている。よって、既に許可が与えられていることを表すcanが用いられている。このように、誰から既に許可が与えられている場合、mayは用いられずcanが使われる。

一方、ある許可を出すのが話者であるということをはっきりと表す場面にはmayを用いる。

- (5) “Mom, Can I go out tonight?” “No. Do you remember the rules in this house? You may not go out in the night.”
「お母さん、今夜出かけてもいい？」「だめ。我が家の決まりを覚えてる？夜の外出は許しません。」

この文では、子どもが外出の許可を求めているのに対し、母親がそれを却下している。許可を与える、与えない権威を持つのが母親であることが明確である。また、母親（＝話者）は、子どもに許可を与えないことをはっきりと示しているため、このときにはmayが用いられている。もう一つ例を挙げる。

- (6) “Excuse me? Is smoking permitted here?” “No, it isn’t. You can smoke outside if you want.”
「失礼ですが、ここでの喫煙は許されていますか。」「いいえ、許されていません。お望みなら外でどうぞ。」

ここでのIs smoking permitted here?は、情報を求める質問であって許可を求めるものではない。また、この質問に対して、ただ喫煙が許されていないという事実を伝えており、応答者は喫煙の許可を与える権限は

際の音がずれることで、すれ違いが生まれるのだ。そしてこのすれ違いが、まさに笑いの種となっているのである。

このように、「かえれ」と「はいれ」が似て聞こえるのは、単なる偶然でも、個人の聞き間違いでもない。そこには、言語の歴史的な音の変化や、音声の仕組み、そして人間の聴覚の心理的な働きが複雑に絡んでいるのだ。そして、それが偶然コントの中で絶妙に活かされた結果、あのネタが生まれたのである。

こうした音の性質や補完によるすれ違いは他のお笑いのネタにもよく見られる。例えば、お笑いコンビの「しゃもじ」による「聞き間違い」というネタだ。1人が「なんでも話せる親友が居る」と発した言葉を、もう1人は「なんでも話せる親友が犬」と聞き間違えて、会話の中ですれ違いが生まれ、観客に笑いが起こる。これも、「かえれ？はいれ？」と似た構造でネタが作られている。このネタも音声学の視点から分析してみよう。

「いぬ」と「いる」はどちらも母音が/iu/である。また、「いぬ」の「ぬ」に含まれる子音/n/は有声歯茎鼻音とよばれる音であり、舌先を上の前歯の裏(歯茎)に当てて、鼻から息を抜いて出す音である。そして、「いる」の「る」に含まれる子音/r/は、有声歯茎たたき音または有声歯茎はじき音とよばれる音であり、舌先を軽く歯茎に当てて、一瞬で弾くように出す音である。これらの共通点は、どちらも舌先を使い、歯茎のあたりで音を出す歯茎音だ。母音が同じであったり、音の出し方が似ていたりするため、区別がつきにくい。さらに、ここで人間の脳が持つ補完の特徴が加わることによって聞き間違いが生じるのだ。

このような聞き間違いは、日常生活の中でも決して珍しいことでは無い。たとえば、「食べろ」と「喋ろ」、「居て」と「行け」など、似て聞こえる言葉は多く存在し、実際に日常会話やお笑いのネタでもたびたび混乱や笑いを引き起こしている。意味のずれによって大きなギャップが生まれることで、相手とのすれ違いが一層印象深くなり、それがユーモアの源になるのだ。言語は本来、正確な情報伝達を目的とした手段である。そうであるにもかかわらず、その音や構造には常に揺らぎや不完全さがつきまとう。しかし、その不完全さこそが、人間らしさや面白さを生む土壌になっている。ことばは時に誤解を生み、すれ違いを招くが、それがコミュニケーションの豊かさや笑いにつながることもある。「かえれ」と「はいれ」のすれ違いは、まさにその象徴的な例だ。音の仕組みを知ること、私たちはただ笑うだけではなく、ことばというものの奥深さにも気づくことができる。

（渡邊来羽）

ない。このように、許可を与える、与えない権威を話者が持たない場合には、mayではなくcanを用いる。逆に、許可を与える源が話者であることが明確であり、話者がそれをはっきりと聞き手に示したい場合はmayを用いて表す。

また、許可を出すのはルールや方針など、人以外の場合も存在する。

- (7) There is a set of rules to show what members may and may not do.
メンバーが何をして良いか、なにをしてはいけないかを示す一式のルールがある。

この文では、メンバーに行動の許可を与える、与えない源が”a set of rules”であり、人ではない。つまり、許可を出す主体が話者以外の場合でも、許可を出す主体が人ではなく、ルールや方針などの名詞句が主語である場合は、mayを用いることができる。

以上のことを踏まえると、

- (8) May I come in?
入ってもよろしいですか？

という文の答え方としては、“Yes, certainly” や”Of course you can.”等を用いるのが一般的であり、mayを使うのは避けたほうがよい。なぜなら、上で述べたように、mayには話者が許可を与えるという意味があるため、入る許可を話者が与えることをはっきりと示す表現になってしまう、尊大な印象を持つ表現になってしまうからだ。一方、canは、(4)にみられるような許可を表す用法の他に、相手にあることをする能力を認め、かつ相手にそうする意図がある場合に用いられる用法がある。そのため、(8)の申し出に対して、入ることができるという能力を認め、かつ相手が入りたいと思っているため、答え手はcanを使う。このような際に用いられるcanには、指示の意味をあらわす用法がある。(8)の申し出に対して”Yes, you can.”（入っていいですよ）という場合、入ることを許可（＝入ることを「指示」）する意味を持つ。このようにcanを用いた返答は、尊大の意味を持つmayを用いた返答と比べると謙譲的な答え方になる。

ここまで述べたことをまとめると、以下ようになる。フォーマルな場面、話者が許可を出す、出さない権威を持つことを聞き手に示す場合はmayを用いる。これに対し、誰かによって許可が与えられている場合はcanが使われる。また、基本はcanが用いられることが多く、改まった場面、話者自身が許可を出す権威を持つことを強調したい場合、またはルールや決まりが許可を出す機能を持つ場合など、なにか特別な理由がある際にはmayが使われる。

mayとcanには以上のような違いがある。どちらも「許可」の意味を持つが、それぞれ「許可」を与える主体やフォーマリティにおいて違いがあるため、場面によって両者を使いわけける必要がある。英語を話す際や聞く際に気にしてみてはいかがだろうか。

引用文献
中野清治（2014）『英語の法助動詞』開拓社、東京。

（植木綾那）

英語の教科書 これってホント？ ～ 5 文型編 ～

日本の中学校や高校で英語を学んだ人なら、一度は「英語には5つの基本文型がある」と教わったことがあるだろう。この5文型とは、SV（主語＋動詞）、SVC（主語＋動詞＋補語）、SVO（主語＋動詞＋目的語）、SVOO（主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語）、SVOC（主語＋動詞＋目的語＋補語）という文の中核となる要素を組み合わせた5種類であり、多くの教科書や文法書の冒頭で大きく取り上げられている。一般的な英文法参考書の1つである『ロイヤル英文法 改訂新版』で「基本5文型」の項目を引くと、例とともに以下の説明がなされている。

- (1) 動詞が主語以外にどんな文の要素（目的語、補語）をとるかという基準によって文を分類すると、基本的には次の5つの型になる。これをふつう基本5文型と呼んでいる。
- (2) a. Everybody laughed. （第1文型）
皆が笑った。
b. His eyes are blue. （第2文型）
彼の目は青い。
c. Foreigners admire Mt. Fuji. （第3文型）
外国人は富士山を賛美する。
d. I gave him my address. （第4文型）
私は彼に住所を教えた。
e. I found the box empty. （第5文型）
箱は開けてみたら空だった。 （綿貫他 2000: 34）

なお、目的語(object: O)と補語(complement: C)の定義は、以下のとおりである。

- (3) a. 〈動詞＋（代）名詞〉の形で、動詞の表す動作の働きを受ける関係にある（代）名詞を目的語という。 (ibid.: 24)
b. 〈主語＋動詞〉、〈主語＋動詞＋目的語〉だけでは意味が不完全な場合に補われる語（句）を補語という。 (ibid.: 28)

(2a)は目的語も補語もとらず、主語と動詞のみで成立している。このように、目的語も補語もとらない文の型が第1文型である。

一方、(2b)では動詞areの後にblueが続いているが、このblueは「主語＋動詞」が表す意味を補うはたらきをしているため補語であると分析される。このように、動詞に補語が続く文の型が第2文型である。

これに対し、(2c)では動詞admireの後に続く語句Mt. Fujiは、動詞admire（賛美する）が表す心理状態のはたらきを受ける関係にあるため、目的語であるといえる。このように、動詞に目的語が1つ続く文の型が第3文型である。

次に、(2d)では動詞gaveの後にhimとmy addressが続いている。これらは、ともに動詞give（与える）が表す行為のはたらきを受ける関係にある。つまり、my addressはgiveされるものであり、himはその受け取り手である。このことから、これらは目的語である判断できる。このように、動詞の後に目的語が2つ続く文の型が第4文型である。

最後に、(2e)では動詞foundの後にthe boxとemptyが続いている。まず、the boxは 動詞found（見つける／わかる）が表す行為のはたらきを受ける関係にあるため、この文の目的語であることがわかる。一方、形容詞emptyは「主語＋動詞＋目的語」が表す意味を補うはたらきをしているため補語である。このように、動詞の後に目的語と補語が続く文の型が第5文型である。

これらの4つの要素に加え、修飾語句（modifier: M）が現れることも多い。しかし、修飾語句はS、V、O、Cからなる部分を作る意味に付加的な意味を添えるはたらきをするものであり、文の中核をなす要素ではないとされる。このことから、修飾語句は削除しても文は成り立つとされている。

上記の簡潔な分類は初学者にとって理解しやすく、英語学習の道しるべとして大きな役割を果たしてきた。実際に、これら5つの型を押さえることで、基本的な英語の構文に対応できるのも事実である。

しかし、英語の文構造を深く観察すると、どうしても5文型に収まらない表現が存在することに気づく。以下の例をみてほしい。

- (4) a. John lives in London.
ジョンはロンドンに住んでいる。
b. *John lives.
ジョンは住んでいる。 （安藤 2008: 10）

(4a)の文を5文型で分類すれば、これはSV型、つまり「主語＋動詞」とそれにかかる修飾語句in Londonで構成されるシンプルな構造であると説明されるだろう。しかし、もしこの文からin Londonを取り除いて(4b)とすると、文法的には可能でも意味的にはほとんど情報がなく、会話や文章として成立しにくいことに気づく。このように、削除しても構文が成立するはずの修飾語句が、実際には文の成立に不可欠な意味要素である場合がある。こうした構造に対して、5文型では適切な説明が難しい。

この問題を指摘し、より柔軟な文型分析を提唱したのが、英国の言語学者ランドルフ・クワークらによる『英語文法総覧(A Comprehensive Grammar of the English Language)』（1985年）である。彼らは、5文型に加えて、動詞が「義務的副詞語句（Obligatory

Adverbial：A）」を必要とする構造を認め、英語の基本文型を7つに拡張した。義務的副詞語句とは、動作や状態がどこで・いつ・どのように行われるかを示す副詞的な語句のうち、文の意味や構造上、欠かすことができない要素を指す。たとえば(4a)の in London のように、副詞的な修飾語句でありながら、文の中核をなすため、削除することはできない。

この義務的副詞語句の導入によって、SVA型（主語＋動詞＋義務的副詞語句）、SVOA型（主語＋動詞＋目的語＋義務的副詞語句）といった構造が新たに加えられることになる。(4a)は、SVA型に該当する。一方、SVOA型は以下のようなものである。

- (5) a. Roy put the car in the garage.
ロイは車をガレージに入れた。
b. *Roy put the car.
ロイは車を入れた。 (ibid.)

(5a)からin the garage を削除した(5b)では意味が中途半端になり、何か物足りなさが残る。このときのin the garageは単なる修飾語句ではなく、putという動詞が必要とする「場所の情報」であると捉えた方が自然である。従来のSVO型ではこのような意味の不足に対応できず、SVOA型とする方が実際の英語の使い方に即している。

動詞には動詞句を形成するためにどのような補完要素をいくつ必要とするかに関する情報が含まれている。この補完要素を「項(argument)」と呼び、動詞がとる項の種類と数を規定した構造を「項構造(argument structure)」と呼ぶ。たとえば、sleepのように主語だけで完結する動詞（自動詞）は、必須とする項は主語となる名詞句のみなので「1項動詞」と呼ばれる。これに対し、giveのように主語＋目的語＋間接目的語の3三つの要素を必要とする動詞（授与動詞）もある。このような動詞を「3項動詞」と呼ぶが、この項は必ず名詞句でなければいけないというわけではない。putのように「何かをどこかに置く」という意味を表す動詞は、SVO型に加えて場所を表す副詞語句／前置詞句が不可欠となる。このような動詞が用いられる場合は、その文をSVOA型で扱う必要がでてくる。つまり、意味の上で必要な要素が文型に反映されるべきだというのが、7文型の主張なのである。

ところが、7文型でも対応しきれない構造が存在する。たとえば、次の例を考えてみよう。(6a)は、補語である形容詞fondの後に前置詞句of catsが続いている。

- (6) a. I am fond of cats.
私はネコが好きだ。 (ibid.: 11)
b. *I am fond.
わたしは好きだ。

(6a)からof catsを削除して(6b)のように短縮してみると、意味は著しく不完全になり、不自然な印象を受ける。ここで注目すべきは、fondという形容詞がof以下の前置詞句を必須としているという点である。実は形容詞にも、単体で用いられる「一項形容詞（tall, happyなど）」と、



chill time

接辞の世界

cycle

自転車

unicycle

一輪車

form

形

uniform

制服

son

音

unison

？

法則を読み取って？に当てはまる単語を考えてみよう

接辞は派生形態素の別称で、ある語の前に付着するものを「接頭辞」、後に付着するものを「接尾辞」と呼びます（派生形態素については次ページの記事を参照）。上記の例は、それぞれの語に接尾辞uni-が付着することで別の語（派生語）ができる過程を示しています。ちなみに、sonは厳密には語ではなく、語彙的形態素の「明確な意味を持つ」という特性と派生形態素の「何か別の要素に付着しなければならない」という特性を併せ持つ「拘束語根」と呼ばれる要素です。また、これは「息子」を表すsonとは別語源で、soundやsonorityなどの語と語源を同じくするものです。

特定の前置詞句などを伴わなければ意味が完結しない「二項形容詞（fond, awareなど）」がある。後者のような形容詞を使った文では、補完語句が欠けると、文そのものが機能しなくなるのだ。

こうした形容詞の性質を踏まえると、SVC型に新たに「義務的副詞語句（A）」を加えたSVCA型という構造が必要になる（安藤 2008）。つまり、(6a)のof catsは修飾語ではなく、文の必須要素であり、文型に組み込まれるべきだと考えられる。このような視点を取り入れることで、英語の基本文型はSV、・SVA、・SVC、・SVCA、・SVO、・SVOA、・SVOO、・SVOCの8種類に再整理されることになる。

このような拡張された文型分類は、単なる知識の追加にとどまらない。実際の英文を読むとき、あるいは自分で英語を書くときに、「この文のどこが欠かせない要素なのか」を正しく見極める助けになる。たとえば、ある語句がなぜ不可欠なのかを理解すれば、英作文でも自然で正確な文を作ることができる。また、英文を読解する際にも、表面的な語順の知識だけでなく、文の構造全体を捉える力が身についてくる。つまり、文型の知識は英語を「分析的に理解する」ための土台になるのである。

結局のところ、英語の文型とは「覚えるもの」ではなく、「使いこなすために理解すべきもの」である。5文型から学び始めるのは、確かに英語学習の入り口としては有効だ。しかし、それだけにとどまると、言語の多様性や構造の複雑さに目を向けることができなくなる危険性がある。必要なのは、「なぜこの語がここにあるのか」「この要素は削っても文が成立するのか」といった問いを自らに投げかけながら、文の意味と構造を見極めていく力だ。文型はあくまで手段であり、目的ではない。英語の奥深さに触れるためには、目に見える形だけでなく、その背後にある「必然的な構造」を理解しようとする姿勢こそが重要なのではないだろうか。

引用文献
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) A comprehensive Grammar of the English Language, Longman, London.
安藤 (2008)『英語の文型』開拓社, 東京.
綿貫陽・須貝猛敏・宮川幸久・高松尚弘 (2000)『ロイヤル英文法（改訂新版）』旺文社, 東京.

（中山果乃）

文学と 言語学の インターフェイス

1949年に出版され、いわゆるディストピア小説の金字塔とも呼べる大ヒットとなった『1984』。その作中には、英語を基に生み出された架空言語「ニュースピーク」が登場する。このニュースピークは現実存在する英語(オールドスピーク)を基に、人工的に作られた言語であり、本来の英語とは異なる性質を持っているとされる。本稿は、ニュースピークとは何なのか、そして実際の英語とどのような「差異」があるのかを、語の成り立ち（語形成）の観点からみていくものである。

この作品の舞台は、政府が国民のあらゆる生活要素——衣服、食料、仕事用品や個人の交際に至るまで——を統制し、管理する国家「オセアニア」。ここでは反政府的な個人の思考は「思考犯罪」と呼ばれ、それに問われた人間は間違いなく極刑に処される。そんな国の政府が支配を永続させるために生み出し、使用する言葉こそがニュースピークである。これは単語の持つ意味を1つに定義し、1つの語を一様に名詞や動詞、形容詞、または副詞にまで変形させ、ある単語の変形で表現可能な言葉は削除するなど、とにかく使用される語彙を削減し、思考せずに使うことが可能であり、思考させないことが重要な言語なのだ。例として、形容詞の簡素化が挙げられる。実際の英語で善悪を表現する形容詞はgoodやbad、その程度に応じてgreatやexcellent、terribleなどが存在する。しかしこれらの形容詞が表す程度や反意関係は、ニュースピークでは非常に単調に、簡単に表現される。例えばgreatはgoodの意味を強めたplusgood(超良い)、excellentは更に強めたdoubleplusgood(倍超良)に変わる。つまり、形容詞の持つ意味合いの程度をplusやdoubleplusといった要素を付加することで表現するのだ。また、形容詞の独立した対義語は消滅し、これも否定の要素を付加することで表す。badならばungood(非良)、terribleならばdoubleplusungood(倍超非良)といった具合である。

作中において、この言語の本懐は以下のように述べられている。

ニュースピークの目的は挙げて思考の範囲を狭めることにあるんだ。最終的には〈思考犯罪〉が文字通り不可能になるはずだ。何しろ思考を表現することばがなくなるわけだから。(『1984』, XXX)

このように、人間の思考の土台となる言語の語彙を限定することで、思考の表現範囲をも限定することを意図して作られた言語がニュースピークである。

上記の例のように、確かにニュースピークは、実際の英語の語彙と比較すると限定的なものであるかもしれない。しかし、果たしてこの制限によってニュースピークは、実際の英語と異なる言語といえるのだろうか。

ここからは、語の意味や構造を研究する学問分野である形態論の知見を基に、実際の英語とニュースピークの比較を行っていく。まずは実際の英語の語形成についてみていこう。形態論では、語を最小の単位としてではなく、独自の意味や機能を持つ要素語、あるいはその集合によって構成されたものであると捉える。このような語を構成する要素を「形態素(morpheme)」と呼ぶ。例えば、unhappyという言葉の場合、否定の意味を表す要素であるUn-と、「幸せである」という意味を表す形容詞happyの2つに分解することができる。つまり、unhappyという「語」は、un-とhappyという「形態素」によって構成されるのである。

追記

その他、実際の英語と同様の語形成がみられる例をみてみよう。まずは、上記でも扱った派生語の例である。

- (1) a. とても寒い(very cold→pluscold)
b. この上なく寒い(superlatively cold→doublepluscold)
c. 速い(rapid→speedful)
d. 暖かい(warm→uncool)
e. 速く(quickly→speedwise)
- (1a, b)は、veryやsuperlativelyなどの副詞で強調されたcoldを元にした形容詞句をpluscold, doublepluscoldと表したものである。(1a)はrapidという形容詞を、名詞speedに派生形態素-fulをつけた形容詞で代用した例である。また、(1d)は形容詞warmを、形容詞coolに派生形態素un-を付着させたもので代用した例である。(1e)は副詞quicklyを、-wiseいう名詞speedに付着させたもので代用した例である。
- 次に、(2)は異形態の消失の例である。
- (2) a. 二人の男(two men→two mans)
b. 二匹の牛(two oxen→two oxes)
c. 二つの命(two lives→two lifes)

(2)にみられる名詞はすべて、実際の英語では複数の屈折形態素-sの異形態をとるが、ニュースピークでは複数の形態が同一である。

また、上記記事で紹介したのとは異なる語形成をみてみよう。言語には、語と語を組み合わせることで異なる語を作り出す誤形成がある、これを「複合(compounding)」といい、複合によってできる語を「複合語(compound)」と呼ぶ。(3)にみられるように、ニュースピークにも複合語が存在する。

今挙げたun-とhappyはともに形態素ではあるが、この2つには単独で語として生じることができるのか否かという点で大きな違いがある。happyはI am happy. などのように、単独で語として機能することができるのに対し、un-は常に何か他の語に付着しなければならない。前者のようにそれ自体が一つの語として成立可能な形態素を自由形態素(free morpheme)と呼ぶ。一方、後者のような他の語に付着しなければならない形態素を拘束形態素(bound morpheme)と呼ぶ。

自由形態素は、語彙的形態素(lexical morpheme)と機能的形態素(functional morpheme)にわけることができる。語彙的形態素は名詞や動詞、形容詞、副詞などに属する、個々の意味がはっきりと理解可能な形態素である。一方、機能的形態素は、前置詞や冠詞、代名詞、接続詞など、個々の語の意味が不鮮明な形態素である。

一方、拘束形態素は屈折形態素(inflectional morpheme)と、付け足された言葉の意味を派生させる派生形態素(derivational morpheme)の2つにわけられる。屈折形態素は、ある語に付着することで文法上の変化をもたらす形態素である。例として、名詞の複数形の-s、動詞に付着する三単現の-sや過去形の-ed、形容詞や副詞に付着する比較級、最上級の語尾である-erや-estなどが挙げられる。一方、派生形態素は、先述のun-のような、別の語に付着することでその意味を派生させる形態素である。個々の派生形態素は、どの品詞の語に対して付着するかが明確に規定されている。un-の場合は意味・機能ごとに付着する語の品詞が決められており、「-ではない」という意味ならば形容詞にのみ付着し(unfair、unluckyなど)、「反対の動作」を表す機能ならば動詞にのみ付着する(undress、unlockなど)。

架空言語「ニュースピーク」は本当に新しい言語なのか



この派生形態素の付着する語の制約を用いることで、複数の形態素からなる語の構造を知ることができる。拘束形態素は一語の中で複数現れることができるが、複数の形態素は一列に並んで付着するわけではない。unhappinessという語を例に、派生形態素のはたらきをみてみよう。この語は、基となるhappyに、派生形態素のUn-と-nessが前後に付着する形で構成されている。すでに述べたとおり、un-は「-ではない」という意味であれば形容詞に付着する。一方、-nessは形容詞に接続し、名詞化させる働きを持つ。すると、unhappinessという3つの形態素からなる語を作るには、unhappyという形容詞を作った後に-nessを接続しなければならない。なぜならば、先にhappyという形容詞に-nessを付着させて名詞happinessを作ってしまうと、形容詞に付着するun-を名詞であるhappinessに付着させることができなくなってしまうからである。ここから、複数の形態素から構成される語は、単純な接続の結果ではなく、それぞれの派生形態素の持つ付着する語の品詞の制限に則っていることがわかる。

以上が英語の語形成過程の概略である。次に、ここからは、ニュースピークの語形成についてみていこう。ニュースピークにはA、B、Cの3つの語彙群があり、A語彙群は 日常的に用いる基本的な語彙、B語彙群は政治的・イデオロギー的な意味を持つ語彙、C語彙群は科学などに使

- (3) a. 犯罪思考→crimethink
b. 良思考・良思考する(大雑把に言えば正統)→goodthink
c. 旧思考(邪悪、墮落といったニュアンスがある)→oldthink
- (3)の語は、動詞thinkと、名詞crimeや形容詞good、oldを複合することでできている。
- ここで注意すべきは、実際の英語では動詞であるthinkが、ニュースピークでは名詞に変わっている点である。このように、語の形態を変えることなく、異なる品詞の語に置き変えることを「転換(conversion)」と呼ぶ。(4)はニュースピークにみられる転換の例である。
- (4) a. 思考(thought)→think
b. 切る(cut)→knife

最後に紹介するのは、「混成(blending)」と呼ばれる誤形成の例である。混成とは、ある語の一部同士が組み合わせることで別の語を作る誤形成である。

- (5) a. 平和省→Minipax
b. 記録局→Recdep

(5a)はministerからのmini-と、pacificからの-paxによる混成語である。また、(5b)はrecordからのrec-と、departmentからの-depによる混成語である。

引用文献
Wikipedia 「ニュースピークの単語一覧」(https://ja.wikipedia.org/wiki/ニュースピークの単語一覧 2025/9/12)

(市川莉玖・三輪健太)

用される専門用語となっている。A語彙群は名詞と動詞の語が大半を占めるが、これらに付着する屈折形態素は実際の英語のものよりも簡素化されている。例えば、名詞や動詞の不規則変化は消失し、名詞の複数形は-sのみに、そして動詞の過去形は-edにのみ統一されている。そのため、childrenのような複数形はchildsに、またwentやthoughtといった動詞の過去形はgoedやthoughtといった形態となる（英語学習者にとっては親切かもしれないが）。このような不規則変化は、異形態(allomorphe)という形態的特性によるものである。異形態とは、同一の機能を持ちながらも、異なる形態をとる形態素のことである。つまり、上述のchildrenやwent、thoughtなどは、-sや-edと同一機能を持った異なる形態の屈折形態素が付着することで形成された語であることになる。このことを踏まえると、英語における屈折形態素は、異形態が消失してはいるものの、屈折形態素そのもののシステムは残存していることがわかる。

次に、B語彙群に含まれる形容詞や副詞の成り立ちをみてみよう。これらの語彙は派生形態素によって語が形成される特徴を持ち、形容詞は-ful(-に満ちた)、副詞は-wise(-方式で)といった派生形態素を付着させることで語を構成していく。実際の英語と同様に、ニュースピークの語彙には、1つの語に複数の派生形態素が付着する例が存在する。3つ以上の形態素によって構成される語として、副詞 ungoodwise(非良方式で)を例にとろう。この語の形態素はun-、good、-wiseの3つにわけられる。実際の英語と同様に、un-は形容詞に付着する派生形態素である。これに対し、-wiseは形容詞に付着して副詞に換える機能を持つ（ちなみに、これは「賢い」という意味のwiseではなく、otherwiseのwiseと同様の語源であろう）。このUn-をgoodに付着させることでungood(非良い)を作り、さらにこれに-wiseを付着させることでungoodwiseという副詞が形成されるのである。これはまさしく、実際の英語の語形成と同様のメカニズムによるものである。

以上の点から、実際の英語とニュースピークの語形成の手法に大きな違いはないことがわかる。両者の間に決定的な違いがあるとすれば、それは語の派生への寛容性の点にある。英語の語形成は、形態素が持つ制約に従った形であればあらゆる派生を歓迎し、時間が経つごとに語彙が増えていく。この点において、実際の英語は語彙の派生に寛容であるといえる。これに対し、ニュースピークの語形成は、たとえ語形成過程が実際の英語と同じであっても、そこに派生への寛容さは存在しない。ニュースピークでは、ある語が別の基本的な語からの派生語で表現できてしまうならば、元ある語は削除され、時間が経つほどに全体的な語彙が削られていく。これは、語形成に対する不寛容のあらわれだろう。

以上、今回は『1984』に登場する架空言語であるニュースピークについて、実際の英語の語形成と比較して、両者の共通点と相違点を論じてきた。文学作品の楽しみ方は多様である。作品によっては、ニュースピークのような架空言語の他にも、独特な言葉遣い、あるいは特殊な言葉遊びが作中に登場するものは多く存在する。それらの構造を探るのも、文学作品の楽しみ方の1つだろう。文学作品に触れる機会があれば、その言葉が生み出す面白さを探し、考えを深めてみるのはいかがだろうか。

引用文献
George Orwell(1949) 1984 Secker and Warburg(ジョージ・オーウェル 高橋和久(訳) (2009) 一九八四年 [新訳版] 早川書房)

(愛川大悟)

編集委員からのお願い

ご質問をお寄せください

日頃の生活や学習で疑問に思っていることや、悩んでいることはありませんか。皆さんが抱えていることばに関する疑問や悩みを“The LinguistIC”編集委員が解決します。お寄せいただいた質問は、本紙で取り上げて回答させていただくことがあります。素朴な質問でも問題ありません。ことばに関して不思議に思っていることや、困っていることがあればなんでもご質問ください。

皆さまのご意見・ご感想をお寄せください

2025年9月から創刊された“The LinguistIC”。本紙をご購読いただいた感想をお聞かせください。創刊間もないこともあり、まだまだ至らない点も多いかと思います。皆様から頂戴したご意見やご感想は、今後の編集・執筆活動に反映させていただきます。ぜひ忌憚のないご意見をいただきたく存じます。

上記のご質問およびご意見・ご感想は、【The LinguistIC】質問・感想フォーム」で合わせて受け付けております。以下のリンクからフォームに入って、ご回答ください。

https://forms.office.com/r/z4XfSBAWH8



学生Yの魔改造計画

#1 ことばを科学するとは

本シリーズは、都市伝説が気になるゼミ生の山崎くんを、「宇宙人は存在するのか」といった問いに対して言語学の知見から科学的に検証できる人物に間改造することを意図したものである。ゼミ担当の三輪先生との対談を通して、本ゼミ生、山崎くんが成長していく過程をご笑覧ください。

（三輪）本企画は、山崎くんが「宇宙人はいるのかいないのか」という都市伝説に関心を持っていたことがきっかけでした。そこから「言語学的アプローチでこのテーマに迫ることができるのではないか」と考え、この企画を立ち上げました。もちろん、宇宙人が実在するかどうかは現時点ではわかりません。しかし、仮に宇宙人が存在し、地球にやってきて人間と対面したとします。そのとき、果たして人間と宇宙人が「ことば」でコミュニケーションを取ることができるのか？——この点を言語学の視点から考えていきます。この問いを4回のレクチャーにわけて、考えていきたいと思います。よろしくをお願いします。

（山崎）よろしくをお願いします。

（三輪）初回では、まず、言語によるコミュニケーションが成立するための前提について考えてみます。たとえば、英語話者と日本語話者が初対面で言葉を交わす場合、互いに相手の言語コード（規則や語彙）を知らなければ、意思疎通は難しいです。身振り手振りなどのジェスチャーによってある程度の情報は伝わるかもしれませんが、それは厳密には「言語によるコミュニケーション」とは言えません。言語とは「コード」による伝達です。日本語には日本語のコード、英語には英語のコードがあります。異なるコード同士では、互いの意味が通じないため、コミュニケーションは成立しません。しかし、人間同士であれば、お互いの言語を学び合うことで、コードの共有が可能となります。

言語理論であったといえます。つまり、人間は言語に関して白紙の状態から生まれてくるが、言語刺激という経験を通して母語話者としての言語行動をとるようになると考えたわけです。このように、構造主義言語学は、当時の科学観に基いて「外在主義」と「経験主義」を採用することで、ことばとその獲得を科学的に探究することを目指したのです。

（山崎）じゃあ、観察可能なことばの音声を記述したり、その言語刺激から言語行動までの過程を記録したりすることで、科学的に言語の本質や獲得の問題に迫れるということですね。

（三輪）そのように結論づけるのはまだ早い。これまでの観察可能なものの記述に徹する科学観は、20世紀中頃から徐々に姿を消します。科学的なアプローチとは観察の記述から理論を構築するのではなく、観察不可能な理論が先に立ち、後に経験的事実に基づいて検証することであるという考えが生まれたのです。つまり、観察可能なものを乗り越えて、理論的仮想物を検証する科学的手法が求められたのです。

（山崎）確かに、それは僕らが一般的にイメージする科学の手法に近い気がします。

（三輪）ここで話を言語学に戻しましょう。1950年代半ばまでは構造主義言語学が言語学の主流を成していたのですが、1950年代後半、ノーム・チョムスキーによって提唱された「生成文法」という新しい言語理論が登場します。これは、理論優先主義に基づいて、従来の外在主義や経験主義から一転し、言語を「人間のこころの中の能力」として捉える言語理論です。ことばに対して理論を優先させるということは、観察不可能なことばの側面を想定し、その言語モデルの理論を立て、経験的事実に基づいて検証していくことを意味します。このことから、チョムスキーは、ことばを我々人間に内在する知識体系であると捉えました。この立場を「内在主義」と呼びます。

（山崎）ことばが人間に内在する知識体系であるとはどういうことですか。

（三輪）たとえば次の例を見てください。

- (1) a. 太郎が本を読んだ。
b. 太郎は本を読んだ。
(2) a. 太郎が読んだ本
b. ??太郎は読んだ本

(1)に示すように、日本語では主語の名詞句に、「が」と「は」のどちらの助詞をつけることもできますね。では、これを「太郎が／は読んだ」

では、人間以外の生物、たとえば犬や猫と人間はどうか？ある音声や動作を習慣化することによって、一定の反応を引き出すことは可能です。たとえば「お座り」と言うと犬が座るようになるのは、言葉の意味を理解しているからではなく、音と動作を結び付けた条件反射の結果と考えられています。このような反応は、20世紀初頭の心理学で研究された「オペラント条件づけ」と呼ばれる学習モデルによって説明されます。これは「刺激を繰り返し与えることで、それに対する反応が強化され、ある行動として形成される」というものです。しかし、犬が「座る」という動詞の概念を人間と同じように理解しているとは考えにくいのです。

この視点から見ると、宇宙人と人間が言語的にコミュニケーションを取るためには、宇宙人も人間と同一の言語コードを持ち、それを学ぶ能力が必要であると考えられます。逆に、彼らが我々の言語コードを持っている、または理解できる素養があるならば、意思の伝達は可能かもしれません。

ここで問うべきは、そもそも人間が持つ「言語コード」とは何か？という点です。英語や日本語といった個別の言語ではなく、人間に共通する「言語の本質的な性質」に目を向ける必要があります。

（山崎）「言語の本質」なんて明らかにできるものなんですか。

（三輪）非常に難しい問いですね。なぜならば、我々は皆言語を使用することができるゆえに、各々が独自の言語観を持ちうるからです。そのため、その本質をめぐる議論は、どうしても主観的な考えの範疇を越えることが難しいのです。このことから、個々人の主観ではなく、客観的事実に基づき、科学的に言語を探究することが、「言語の本質」を問う上で重要になってくるのです。

（山崎）でも、「科学的に探究する」って、具体的にどういうことをすれば「科学的」と言えるんですか。科学的に言語を探究するというのが、いまいち想像できません。

（三輪）これも難しい問題です。なぜならば、どのような説明が「科学的」とされるかは、実は時代によって異なってきたからです。ここで、科学的な言語へのアプローチ方法を検討する前に、まずは言語学の歴史をたどってみることにしましょう。実は、近代に入るまでは「言語学」という独立した学問は存在しませんでした。近代以前のことばの探求といえば、古典の研究や各言語の文法研究が主でした。そんな中、18世紀から19世紀にかけて、インドの古代文献がヨーロッパに紹介されました。その中のサンスクリット語が、ヨーロッパの多くの言語と共通点を持つことに気づいたサー・ウィリアム・ジョーンズは、言語に共通の祖先（印欧祖語）があると考えました。これを皮切りに、ヨーロッパ諸語をはじめとする歴史的な系統を明らかにする研究が進んだ

の部分で「本」にかかるように連体修飾させてみましょう。すると、(2)のようになります。この時、助詞「が」を用いた(2a)の例は文法的な表現になりますが、助詞「は」を用いた(2b)は不自然で、違和感があります。(2b)が文法的ではないと正しく判断できるということは、その判断に必要な知識が我々の頭の中にあることになりますが、これは「内在主義的な言語能力」の存在を示唆しています。

（山崎）なるほど。内在主義が構造主義言語学の外在主義と対立する考えであることがわかりました。では、経験主義の方はどうですか。経験主義においても対立してるんですか。

（三輪）そのとおりです。この生成文法が提起した重要な問いの1つが、言語獲得に関する問いでした。先ほど、連体修飾節内では「は」が現れることができない例をみましたが、この文法性の判断を可能にする言語知識は、構造主義言語学がとる経験主義では説明できません。以下の例をみてください。(3)には(2b)と同様の連体修飾節が含まれますが、対比の構造であれば連体修飾節内でも「は」を用いることができます。

(3) 太郎は読んだが、花子は読まなかった本

「は」を含む連体修飾節が存在するということは、(2b)で感じられる違和感を生む知識は、ただ経験によってのみ得られたわけではないということを示しています。

（山崎）経験によってのみではないということは、他の何かがあったってことですか。

（三輪）そう考える根拠があります。まず、こどもが経験する言語刺激は文法的な文ばかりというわけではありません。身の回りの言語表現を注視してみると、その多くが言い間違いや誤った表現を含んでいるのがわかります。また、こどもが経験する言語刺激は当然ながら有限ですが、人間の言語知識は無限の創造性を持っています。このように、こどもが経験する言語刺激は、質的にも、量的にも十分とはいえないのです。これを「刺激の貧困」と呼びます。しかし、この刺激の貧困にあっても、こどもは大体3年から5年の期間で、大人の文法とほぼ同等のレベルの文法を獲得するといわれています。これは非常に不思議なことです。この驚異的な事実を、経験によって説明することは不可能であるとチョムスキーは結論づけました。そこで考えたのが、大人が持つ内在的な言語知識に発達しうる言語能力が存在し、この言語能力を人間は生まれながらにして持っているという考えでした。例えるならば、ことばの種のようなものがあり、そこに日本語の水を与えれば日本語の木に育ち、英語の水を与えれば英語の木に育つ。そして、我々はそのことばの種を持って生まれてくる。こ

ことで、言語学という独自の学問が誕生しました。

しかし、この頃の言語研究はまだ科学的とはいえませんでした。言語の歴史的探求を進めていくと、どうしても「なぜそのような変化が生じたのか」という問いが起きます。しかし、当時はその問いに回答する知見が不足していたため、「〇〇はゲルマン精神の発露である」などのような主観的回答が多くみられました。このような反省を乗り越えるため、科学の一分野として仲間入りすることが、言語学にとっての大きな課題だったのです。

しかし、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、大きな転機が訪れます。それが、フェルディナン・ド・ソシュールの言語論に基づく「構造主義言語学」の登場です。ソシュールの言語論は多岐に渡りますが、特にことばを記号体系として捉えたこと、歴史的研究所とは異なる言語研究の方針を打ち出したこと、そして「ことば」と呼びうるものを細分化した点などが後世に大きく影響を与えました。ソシュールの言語論は欧米諸国に広まり、構造主義言語学という新たな言語理論を形成しました。

この構造主義言語学が拡大したのは20世紀前半になりますが、この時代では、科学の対象となるものは観察可能なものに限定され、それらを記述することが科学であると考えられていました。この科学観を背景に、構造主義言語学は言語学の科学化を模索し始めます。言語の観察可能な側面とは、その音声です。それゆえ、構造主義言語学では諸言語の音声の観察・記述を進めていきました。このことからもうかるとおり、構造主義言語学では、ことばを人間の外部に存在する、観察可能なものとして位置づけていました。このような立場を「外在主義」といいます。

（山崎）確かに、観察できないことを客観的に検証するのは難しそうですね。ことばが人間の口から発せられた外部のものというのは、直観的にも正しいような気がします。

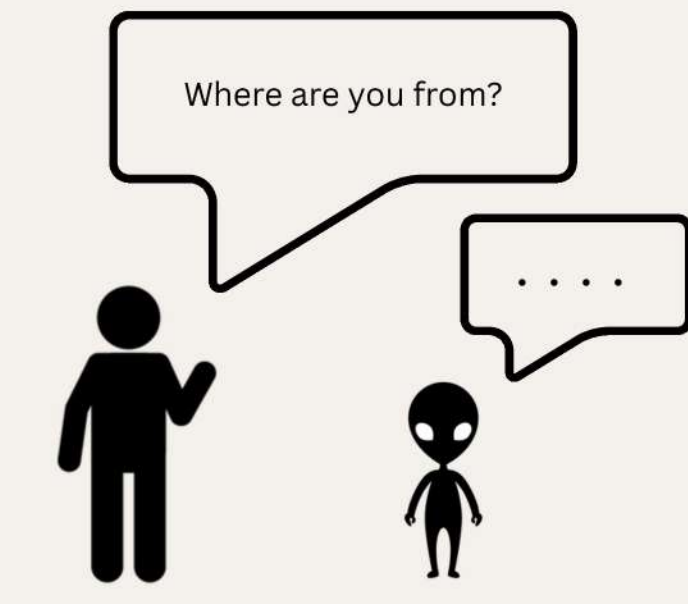
（三輪）一方、同様の科学観は、ことばの研究以外にも大きな影響を与えていました。それが、心理学です。人間のこころは観察できません。人間のこころに関して観察できるのは、あくまでこころから生み出される行動だけです。ですので、観察可能な行動を研究対象とすることが、人間のこころを探る心理学の科学的なアプローチであると当時は考えられていました。この心理学の潮流を、「行動主義」と呼びます。上述のオペラント条件づけは、この行動主義の中から提案された学習モデルです。構造主義言語学は、この行動主義の影響を強く受けることとなります。特に、言語獲得にその影響が色濃く現れます。行動主義の代表的研究者の1人であるB・F・スキナーは、言語獲得がオペラント条件づけによって説明されることを主張しました。つまり、外部からの言語刺激を経験的に繰り返し与えられることで、言語行動に至ると考えたわけです。この点において、構造主義言語学は伝統的な「経験主義」に基づく

のことばの種があることによって、人間な不完全な言語刺激であっても、非常に短期間に自身の周囲のことばを獲得することができるというのが、生成文法の考え方の中核になります。では、どのような言語モデルであれば人間の言語知識として認められるのか。また、どのような知識体系であればプラトンの問題を解決できるのか。この問いを常に持ち続けながら、生成文法は70年以上研究を続けています。そこで明らかになってきた人間言語のメカニズムを、人間以外の存在（たとえば宇宙人）が理解・運用できるかどうか。それが、異種間コミュニケーションの可能性を左右する大きな鍵になるのです。したがって、以降のレクチャーでは、「人間の言語コードとは何か」をより明確にし、それを基盤として他の知的生命体との対話可能性を探っていくことにします。

（山崎）この企画の方向性がようやくみえてきた気がします。ことばを科学的に探究するというは、理論的言語モデルを仮定し、言語現象や言語獲得の問題を解決できるかどうかという基準によって検証していくことなんですね。

（三輪）そうです。具体的にどのような分析が行われてきたのかについては、次回以降のお話になります。お楽しみに。

（山崎晃太郎）





私は現代英語学科の英語技能科目である「Grammar」を担当しているが、そこでは毎回の授業後に学生からの質問やコメントを回収している。本連載は、学生から寄せられる質問の中から特に興味深いと感じたものを取り上げ、英語学的視点による解説を通して「Grammar」の授業を覗き見るものである。

今年度前期のある授業の中で、受動態の派生過程について説明をする機会があった。説明自体は教科書通りの「能動文における目的語を主語にし、動詞を「be動詞＋過去分詞」の形式に変換する」というものだった。この紋切り型ともいえる解説に対して、ある学生が授業後に私のところにやってきて、次のような質問をした。

「[S be said+to不定詞]という受動文がありますが、もし本当に受動文が「目的語の名詞句を主語に移動させて派生する」のならば、[say+O+to不定詞]の形式が存在するはず。しかし、sayは不定詞を後ろに取れません。本当に受動態は「目的語を主語に移動させ」て作られるのでしょうか」

確かに(1a)のような「S be said+to不定詞」という形式は存在するが、その元の形式と想定される(1b)のような「say+O+to不定詞」の形式は存在しない。

- (1) a. Charles was said to be a good comedian.
b. *They said Charles to be a good comedian.

- (8) 格フィルター
音形を持つすべての名詞句は、格が与えられなければならない。

この格フィルターは名詞句が格を持たないことを禁じる制約であり、格を持たない名詞句が文中に存在すると、その文は非文法的な文として弾かれることになる。

さて、(7)の構造を見ると、受動形態素の付着により、他動詞Vから名詞句₂に対して与えられるはずであった目的格が与えられていない状況になっている。これでは(8)の格フィルターによって非文法的な文となってしまう。これはまずい、ということで取られる対処法が名詞句移動である。この名詞句₂はこのままの位置にいては格が与えられないが、幸いなことに受動形態素の(6a)の機能によって、時制辞Tの領地に空席ができています。この空席に移動すれば、(4a)の格付与規則により主格が与えられ、格フィルター違反を回避することができるのである。これが、受動文において名詞句移動が起こる理由である。

これようやく、「なぜ(1b)の「say+O+to不定詞」は存在しないのに、(1a)の「S be said+to不定詞」が可能なのか」という冒頭の問いに回答する準備が整った。ここで思い出して欲しいのが、動詞の後の「O+to不定詞」の部分は、(2b)で示したように非定形節であるという点である。(1b)が非文法的であることから、一見すると動詞sayは非定形節を後ろにとらないようだが、(10)に示すとおり、sayは定形節であれば後に続けることができる。

- (10) They said [_節 Charles was a good comedian].

sayが定形節を後ろにとれるということは、同じく節の要素である非定形節がとれても良さそうなものである。では、なぜ(1b)は非文法的となるのか。それは、格付与規則と格フィルターの仕業である。(10)の[]で示される節内の要素は、(4b)の規則にある他動詞の領地（統率領域）の領域外となる。また、時制を持たない非定形節内の時制辞toは(4a)の規則の対象外となり、格付与能力を持たない。このことから、(1b)の非定形節主語であるCharlesは格が与えられないことになり、このままの位置では格フィルターに違反することになる。

この格フィルター違反を回避するためにとられるのが、上述の受動化である。動詞sayに受動形態素が付着することで、(1b)は(11)の構造をとることになる。(11)では、(6)の機能により主節の主語が空席となり、かつsayの格付与能力が失われている。

もし受動文が「能動文の目的語を主語に移動」させて派生するのだとすると、存在しない「say+O+to不定詞」から「S be said+to不定詞」は当然のことながら派生し得ない。つまり、この学生の質問は、私の説明（というか、教科書にも載るほどの通説）の矛盾点を突いているのである。素晴らしい観察力、考察力である。

この問いに対する回答は学校英文法のレベルでは不可能なので、英語学（特に統辞論(syntax)）の知見を要する。具体的には、「不定詞の構造」、「名詞句移動」および「格理論」という原理についての理解が必要となる。以下で1つずつ解説していこう。

まずは、不定詞の構造について。学校文法で「不定詞」と呼ばれる表現は、英語学では非定形節(infinite clauses)と呼ばれており、その名のとおりに「節」として扱われる。「非定形」というのは、主語の名詞句や時制など情報によって動詞の「形が定まる」一般的な節（「定形節」と呼ばれる）とは異なり、これらの情報によって「形が定まらない」という意味である。不定詞が節であるということは、主語、述語および時制辞を備えていることを意味している。以下の例を見てみよう。

- (2) a. Charles expected Edna to watch his movies.
b. Charles expected [_節 [名詞句 Edna] to [_{動詞句} watch his movies]].
c. Charles expected her to watch his movies.

(2a)内の非定形節は、(2b)のように、名詞句Ednaを主語とし、動詞句watch his moviesを述語とする節であり、非定形節内に現れるtoは、時制を持たない時制辞であるとされる。(2a)のEdnaは非定形節の主語であるが、(2c)のように代名詞に置き換えると目的格herとなることから、主節の動詞expectから目的格を与えられていることがわかる。

なお、非定形節は(3a)のように（意味上の）主語を取らない形が観察される。これは、(3b)に示すように、音形を持たない要素が主語として存在すると考える。つまり、主語が観察されようが、されまいが、不定詞は主語と述語を備えた節であると考えられるわけである。

- (3) a. Charles expected to watch his movies.
b. Charles expected [_節 [名詞句 $\emptyset$] to [_{動詞句} watch his movies]].

次に、名詞句移動について説明する。ヒトのことばは様々な固有の特徴を持つが、その1つに「移動現象」というものがある。移動する対象はさまざまであるが、その一つに名詞句が含まれる。名詞句が元々の位置から別の位置に移動する現象を「名詞句移動」と呼ぶ。名詞句移動の代表例として挙げられるのが、今回問題となっている受動文の派生である。冒頭の解説にもあるとおり、受動文は「能動文における目的語を主語に」することで派生する。この説明はつまり、英語の受動文において名詞句移動が起こることを言い換えているわけである（ちなみに、日本語の受動文では名詞句移動が起こらないとする説が有力である）。

そもそも、格理論で扱われる格は、一般的な格の理解とは少々異なる。現代の英語では名詞句の格変化が衰退し、代名詞でのみ格変化が観察される。例えば、(2a)の目的語である名詞句のEdnaには格変化はみられないが、(2c)の目的語である人称代名詞herは目的格の形態をとっている。このように、現代英語では名詞句には格が付与されているか

- (11) [_文 [] T(be) said [_節 Charles to be a good comedian].

これにより、非定形節の主語であるCharlesは空席となった主節の主語位置への移動に可能になる。この位置は時制辞Tの領地であるため、主格を受け取ることができ、晴れてCharlesは格フィルターの回避に成功するのである。

つまり、動詞sayは非定形節をとることができないのではなく、非定形節をとっただけでは非定形節主語に格が与えられないために、格フィルター違反のために(1b)のような文は非文法的となる。しかし、受動形態素の特性により空席になった主節の主語位置に非定形節の主語を移動させることで、この格フィルター違反が回避できるために、(1a)のような受動文でのみsayは非定形節を後ろにとれるのである。以上が、学生の問いに対しての回答になる。

引用文献
Chomsky, Noam (1981) Lectures on Government and Binding, Foris, Dordrecht.
Jaeggli, Osvaldo (1986) “Passive,” Linguistic Inquiry 17, 587-622.
(三輪健太)

はその形態からは判別できないが、格理論では名詞句には抽象的な格が付与されたと考える。

この抽象的な格は、(4)に示すような「格付与規則」に従って、格付与能力を持った要素（格付与子）から、格付与子が「統率」する領域に起こる名詞句に対して与えられる。

- (4) a. 時制を持つ時制辞は統率する名詞句に主格を与えよ。
b. 他動詞は統率する名詞句に目的格を与えよ。

統率の定義は複雑なので説明を割愛するが、比喩を用いて説明しよう。動詞の語形を変化させる現在時制や過去時制といった時制辞や他動詞といった要素は、文中にある領地（統率領域）を持つ。これらの要素が、その領地に住む領民である名詞句に、時制辞であれば主格を、他動詞であれば目的格を与えるとするのが(4)の規則である。

この格付与の仕組みを、単純な他動詞文で確認しよう。SVOからなる他動詞文の内部構造は、概略(5)のように示される。文は主語である名詞句₁と述語である動詞句、そして時制辞(T)によって構成される。動詞句内の名詞句₂が目的語である。

- (5) [_文 [名詞句₁] T [_{動詞句} V [名詞句₂]]]

編みかけ部分はそれぞれの格付与子の統率領域を表しており、言うなれば左側の編みかけ部分が時制辞Tの領地であり、右側の編みかけ部分が他動詞Vの領地となる。(4a)の規則により、時制辞Tは、領地内に生起する名詞句₁に対して主格を与える。一方、(4b)の規則により、他動詞Vは領地内の名詞句₂に対して目的格を付与する。以上が格付与の仕組みである。

ここで、改めて受動文の派生に話を戻そう。すでに述べたとおり、（ほとんどの）受動文は(5)のような他動詞文をもとにして、目的語が主語に名詞句移動することで派生する。では、なぜ移動するのか。それは、動詞に付着する「受動形態素」と呼ばれる要素に起因する。受動文は「be+過去分詞」の形式を持つが、この過去分詞を一般的な過去分詞と区別するために受動分詞と呼ぶことにする。受動分詞は動詞にある要素が付着することで形成される。例えばbe動詞に-enが付着することで受動分詞beenが形成されるが、この受動分詞化させる要素が受動形態素である。この受動形態素は(6)の機能を持つとされる(Jaeggli 1986)。

- (6) a. 主語の抑制
b. 目的格の吸収

(6a)の機能は、(5)の構造から名詞句₁を取り除くことを意味する。また、(6b)の機能は他動詞から(4b)の格付与能力を削ぐことを意味する。すると、受動形態素の付着により、(5)の他動詞文は(7)の構造に変化する。(7)では、時制辞Tの領地内の名詞句が削除され、他動詞Vの格付与能力が失われている。

- (7) [_文 [] T [_{動詞句} V-en [名詞句₂]]]

ただ、まだこれだけでは名詞句移動の根拠が不十分である。そこで、最後に紹介するのが、格理論で規定される制約「格フィルター」である。

The LinguistIC 第1号

発行日 2025年9月15日
発行者 現代英語学科 三輪健太ゼミ
編集委員長 平子快季
監修 三輪健太
記事執筆者 8名
レイアウト 市川莉玖・宇田川凜

*本紙は、茨城キリスト教大学2025年度「学生団体企画奨励金の助成を受けて刊行しています。

https://drive.google.com/drive/folders/1l3ymEbhM7t6Pd1rQ-eKt8bgIxYyZaVTV?usp=share_link

※オンラインからでもご講読いただけます。
右のリンクからダウンロードしてください。



現代英語学科三輪ゼミ開発
英文法用語検索アプリ

IC生限定



英語学習時のおともに

わからない英文法用語をササッと検索



先生やテキストの解説がわからない。それは英文法用語の理解不足が原因かもしれません。そんな時、スマホでササッと用語を検索して、英語学習の効率を高めましょう。

アプリ登録の際は、以下のリンクからインストールしてください。インストールの際に、スマホのほむ画面に保存すれば、いつでもどこでも知りたい用語が検索できるようになります。

<https://kenta-miwas-team.adalo.com/social-media-app>

